

## 摩珂不思議なライダー対策

土屋省三\*

### A Mysterious Measure for Motorcycle Riders

Shozo TSUCHIYA\*

ライダーの交通事故や暴走族についてまで、メーカーの社会的責任が追及されたり、若者のバイク運転について高校側がクチバシをいれたり——外国人記者にこんな日本の実情をいくら説明しても、彼らは理解出来ない。「何故」「なぜ」「そんな馬鹿な」から「過剰サービスだネ」「管理社会から民主主義は生まれないよ」「バイクは個人の好みの問題。なぜ学校はそれを制限するの」——決まってこんな答えがはね返ってくる。

デモクラシーの先進国、クルマ社会の先輩国では到底考えられないことが堂々とまかり通り、それに逆らうことは“悪”、とさえ見なされる国ニッポンは、摩珂不思議なところだ。しかし嘆いてばかりいたのでははじまらない。私達はこの不思議国にどうやら一生住まなければならないのだから、どうしたら「何故・なぜ」が連発されない社会を築けるかを考えなくてはならない。

外人記者が首をかしげる原因の一つに、“危険だから”と学校が生徒からバイクを取り上げ、従わない生徒を処罰する“三ない運動”がある。バイクに触れさせず乗せなければ事故がゼロになるという日本独得の滑稽な発想。しかも教育者が音頭をとっているのだから恐れ入る。処罰を伴った締め付けだが、隠れ乗車や、無免許運転に拍車をかける結果になり、かえって事故をふやしている。

反社会的なこの愚かな規制の非に気付いてか、文部省は「乗せて指導する」方向で予算を組み、メーカーの協力で教材も整いつつある。若者が最も興味のあるバイクを使って交通教育、互譲の精神を育くむシステムを作ろうというわけだ。

実技に偏重せず交通社会人を育成するのが本来の姿であり“正論”なのである。私もこの“正論”を推しすすめてきたし、IATSSの皆さんもこの支持者だと思ふ。私はあらゆる機会をとらえて、“正論”をぶち“三ない、絶滅の日は近い”と主張、教師や若者の質問に対しても同じように高らかにラッパを吹き続けてきた。

だが、全国の教育現場や教育委員会、警察などを取材すればするほど、この主張の甘さに気付く。絶滅の日は決して近くはない。これが現場をまわっての結論だ。学者、識者が考えている以上に現場の壁は厚く、堅固。甚だ残念なことだが事実は事実として率直に認めなければならない。

校長、教委、警官らは二つの顔を持つ。たて前と本音の顔だ。学者、識者に対しては「交通安全教育は絶対必要」と“三ない”を否定するが、これはあくまでたて前。額面通り受取ると「近い」ことになる。だが、彼らがいったん職場に戻ると別の顔になり、強力に“三ない”を推進する。これが本音であり、そうすることが波風をたたせないことに役立つからだ。それが教育界というものである。

そもそも“三ない”は地域社会から起った運動。それだけに根強い。政府→文部省→教委→高校の縦の線で“正論”を伝達、その実現化を図ることは大切だが、それ以上に必要なことは、受け皿になるべき教師、PTA、生徒を含めた地域社会への啓蒙運動ではないだろうか。

役人がいくら鐘やタイコをたたいても、受け皿を“教育”、しない限り空振りに終わってしまう。つまり“三ない”はおかしいじゃないか”と地域社会の盛りあがりの声が必要なのである。地域社会への働きかけを怠るなら、10年後も今と全く同じか、もっとひどい時代になる恐れが十分ある。

\* 毎日新聞社編集委員  
Senior Writer, The Mainichi Newspaper  
原稿受理 昭和57年1月6日